

**取組実績の概要** 【2ページ以内】

「キャンパス・アジア」構想の下、東京大学は北京大学、ソウル大学校と多文化的な視点を持つ次世代のアジアにおけるリーダーの育成を目的とし、公共政策・国際関係分野で最高水準の学位プログラムを構築・実施した。3大学間でコンソーシアム（BESETO）を形成し、3方向での交換留学及びダブル・ディグリー（DD）の導入を目指す取り組みを行った。参加学生も本プログラムに期待される人材像を共有し、学生間で互いに学びあうことにより、相互理解を深めている。さらに、本プログラムでは学生間の交流のみならず、教職員間でも活発な人的交流が行われている。本構想の取り組み実績は以下の通りである。

**【コンソーシアムの形成】**

東アジアにおける公共政策・国際関係分野での最高水準の学位プログラムを構築するため、3校の間でコンソーシアム（BESETO）を形成した。本プログラム運営のため、その意思決定機関として、各大学の教職員から構成されるBESETO Joint Academic Boardを設置し、年に1～2回のJoint Meetingを開催し、各校での取組状況や問題点、学生からのフィードバック、今後の予定などについて協議を続けてきた。Joint Meetingは各大学持ち回りで事務局を担当することで実施している。平成27年12月には、本取組の集大成として3校の共催によるシンポジウムを東京大学にて開催し、3校合同で3カ国のモニタリング調査団による訪問を受けた。また、Joint Meetingでは、本取組終了後の予定について協議し、プログラムを継続し、学生への経済的支援については各国で資金調達の努力をすることについて合意した。

**【プログラムの仕組み】**

本構想では、日中韓についての相互理解を有するグローバル人材を養成するという目的の下、原則として全ての参加学生が3カ国すべてを回る形式の教育プログラムを構築・実施した。第一段階では「交換留学」、第二段階では「ダブル・ディグリー」を目指した。交換留学においては、参加学生は、出身大学で1年間、他の2大学で1学期（半年）ずつ学習し、それぞれの留学中の単位を出身大学で認定して、2年間で出身大学の学位および留学中にキャンパス・アジアプログラムで単位を履修したことの認定書を他の2大学からそれぞれ受ける。ダブル・ディグリーでは、参加学生は、出身大学で1年間、2つ目の学位を受ける大学で1年間、さらにもう一方の大学で1学期間学習し、2年半で2大学の修了要件を満たして出身大学を含む2つの学位記ともう一方の大学の認定書を受ける。参加学生の希望によって、交換留学のみで2年間で修了するかダブル・ディグリーと交換留学を行い2年半で修了するかを選択する。また、日本、中国、韓国の大学に留学し、専門分野を学びたいと考える学生にとっての語学が障壁とならないよう、本プログラムでは英語を使用言語とした。さらに、日本から中国、韓国への留学希望者を確保するために、明確な目的意識を持ち東アジアの公共政策・国際関係を学びたいという学生を募集すべく、北京大学およびソウル大学校にて修得した単位の互換を修了要件の一部に組み込んだ新しいコース「公共政策キャンパスアジアコース」を設置した。

**【実績】**

本取組では、バイラテラルな大学間協定が東京大学-北京大学、および東京大学-ソウル大学校にそれぞれあったため、BESETOコンソーシアムを形成し、3校連名の学生交流（交換留学）に関する覚書を平成23年度に締結し、平成24年度より、BESETO間で各大学毎年約10名の学生の派遣および同数の受入を開始した。ダブル・ディグリーの覚書については、単位認定の手続きに加えそれぞれの留学先における学位取得の手続きを考慮して、バイラテラルでの交渉を行うこととした。平成24年度に、東京大学とソウル大学校、東京大学と北京大学のダブル・ディグリーに関する覚書を締結し、平成25年度よりダブル・ディグリーを開始した。北京大学では実際の派遣の1年前から北京大学での学生を発生させ、平成26年に派遣が開始された。ソウル大学校と北京大学とのダブル・ディグリーに関する交渉は、中国政府が新たなダブル・ディグリーの導入について否定的であったが、平成27年度には中国政府がダブル・ディグリー推進に方向転換し、ソウル大学校と北京大学の本格的な交渉が開始された。本取組終了時においては、覚書の文言については基本的に合意し、単位互換できる科目の確認作業を行っている段階までに至った。なお、本取組終了までに、サマースクールなどの短期プログラム、半年間の交換留学、1年間のダブル・ディグリー合わせて延べ95人の派遣、71人の受入を行った。平成24年度から平成27年度までに、東京大学からは北京大学への交換留学生在が12名、ダブル・ディグリー生が6名、ソウル大学校への交換留学生在23名、ダブル・ディグリー生4名が派遣された。また、北京大学から交換留学生在27名、ダブル・ディグリー生7名受け入れ、ソウル大学校から交換留学生在3名、ダブル・ディグリー生を17名受け入れた。さらに本取組では、3大学に1年ずつ在籍して3つの学位を取得するトリプル・ディグリーを実現する可能性を検討したが、理論上は成り立つもの実際においては実現可能性が低いことが判った。

**【質の保証を伴うプログラム】**

本構想では、単位認定の手続きを明確化し、東アジアの公共政策・国際関係分野において最高の質の保証を伴った学術交流プログラムとすることを目指した。単位の相互認定については、それぞれの大学における規定と手続き（他の大学院で取得した単位の認定に関わる規定）に従って行った。ダブル・ディグリー実施に際しては、協定校との協議を行い、以下のような手順で制度の整備を行ってきた。まず、相互で単位あたりの授業時間（直接コンタクトの時間数）をもとに換算方法をルール化（北京：ソウル：東京＝1：1：1）し、次にそれぞれの修了要

【公表】

件やカリキュラムの構造を比較した。学生が2大学のコア科目の履修に終始することなく最大限に学びの価値を高めるため、それぞれのコア科目について、内容が近いと認められる科目についてはどちらか一方で履修すればよいこととし、単位の読み替え先として対応する科目についての一覧表（マッピング表）を作成した。ダブル・ディグリーについては学生の一般的な履修モデルを提示する等、単位互換のプロセスや成績管理、履修状況管理などについても各校で協議の上、ガイドラインなどにまとめ、随時情報を更新できるようにした。3大学がそれぞれ異なる教務システムのもとで、最大限プログラムとしての一貫性を保てるよう配慮しつつ、成績と学位授与の方法についてはそれぞれの大学における規則によって管理し、各大学における修了要件を満たした段階でそれぞれの大学から学位を授与することとした。学生の履修指導については、派遣前の学生および受入直後の学生に対し、修了要件の確認、履修すべき科目、取得すべき単位（下限）、単位認定の方法（認定できる単位数の上限）などについて、担当教職員から指導や英語による履修指導を行った。

また、内部質保証や改善のため、授業後やプログラム終了後にアンケートを実施し、学生からのフィードバックを得る機会を設けている。これらはプログラム内容の改善に役立てている。また、定期的開催されるJoint Meetingでも実施内容の振り返りを行って議論している。

【サマープログラム、教職員の交流】

本構想においては、教員の相互派遣や職員の相互訪問をおこない、交流を深めるとともに、三カ国の教員による集中講座などを企画した。サマープログラムなどにより、3校の教員を相互派遣して授業を行った。また、Joint Meetingでは、内容的に親和性が高く単位の振替が可能なコア科目などを対象として、3校での共通科目を作ることに協力を開始した。これは参加学生からの要望とも一致しており、本取組終了後も引き続き東アジアの公共政策・国際関係分野におけるカリキュラムの共同開発を行うことに合意した。学生交流以外にも、教員の交流や職員の相互訪問・頻繁な連絡を通して、大学間に信頼関係に基づいた人と人のつながりを構築しつつある。

【留学先の言語と文化】

本取組では、英語の他に留学先の言語を学習することを基本とし、専門分野の授業だけでなく、文化的な体験を通してお互いの文化や習慣、歴史・社会の特性をより深く理解させるために、各大学や大学院独自で提供している語学学習に参加させた。

【インターンシップ】

本取組では、単に授業の履修のみならず、留学中に社会との接点や職業体験の機会を持つことでその人的資本を高めることができるよう、留学生のインターンシップ受け入れ先の企業や機関を開拓し、留学生へ積極的に斡旋した。日本の企業や公的機関におけるインターンシップの体験がきっかけとなり、日本で就職することができたというダブル・ディグリー学生を複数出した。

【本構想の付加価値】

本構想では、優秀なグローバル人材の養成をその目的と定め、東アジアにおける公共政策・国際関係分野での最高水準の学位プログラムの開発・構築を目指した。大学院レベルでの英語を教育言語とした3カ国間での交換留学およびダブル・ディグリー・プログラムは先例がないもので、難易度の高い試みであった。3大学間の教育制度の違いにより、単位取得や互換方法、成績評価の方法などをめぐり問題も発生したが、それらを慎重に協議して解決方法を発見したことは今後、さらなる高度な教育プログラムを構築する上で有益であると考えられる。また、3大学の強みや特性を活かしてプログラムを編成し、学生が3カ国すべてを回る形式の交換留学及びダブル・ディグリー・プログラムを構築、実施したことは、今後、グローバル人材の養成を目指す他大学にとっても参考になると考えられる。また、このプログラムへの参加学生の質の高さに関しては定評があった。本取組開始間もなく、3カ国の政治状況が悪化する中で始まった交流プログラムであったが、特に本取組は東アジアの公共政策・国際関係分野におけるプログラムであったこともあり、参加学生の意識は極めて高く、学生達の「東アジアをよく知りたい、関係を良くしたい」という共通した思いと学生同士の信頼感に基づく交流を行うことができた。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	5人	10人	15人	20人	22人	22人	29人	24人	71人	76人
実績	14人	0人	22人	8人	13人	34人	33人	15人	13人	16人	95人	73人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。